日本医史学雑誌　第62巻第4号（2016）　465–474

青山胤通家関連文書（3）

青山文書の会

［13］賀古鶴所（かこつるど）の書簡（前承）

19　大正3年8月11日　（6号）

（封筒表）　信洲軽井沢別邸　青山胤通殿　親展

（封筒裏）　東京牛込矢来町一　賀古鶴所

拝啓，尊書拝見仕候，炎威殊の外厳敷候処，益御清康奉大賀候，先月末ごろより欧洲禍乱の事ニ心をとられ候て契兄の御出遊をも知らずニ過ごし罷在り，此度欧州戦乱に付き東洋を禍渦に投せず，依然安寧を維持シたきもの，御高説至極御同意ニ候，実ハ先日来彼れ是れ勘考仕り候上，悶々の情忍ひ難く，去る三日概要次ニ列記候如き愚説を立て候て，ひそかに例の政略等を計り，それぞれ老人をも説かせ候，老人ハ同意致候へども何の甲斐も無く，五日にハ遂ニ我が当局者の方針といふもの各新聞ニ現れ，日英協約実行といふ事ニ相成り申候，如か利する所ありてわざと協約履行を公示したるものか，僅ニ一洲一島を得んが為めニ我国の存亡を賭するか如き愚ハ為さゞるべく，或ハ米をおびき出さんが為めニなしたるか，彼の軍艦若し大西洋より遙ニ出で来らんか，これを撃沈することハ得べきも，いづれの地点ニ我が陸兵ハ上陸すべきか，要するに，我が当局者ハ唯々親英過度の為め，彼が云ふがまゝになりしにハあらずや，但し以後大勢の遷移につれて多少改善する所あらバ不幸中の小幸なるべき歟，もはや今日となりてハ騎虎の勢いかんとも致し方無之候，日記中より拾ひ出して左ニ記るし申候，宜しく御判読下さるべし，此度欧洲之禍乱ハ欧洲本土ニ於ける戦争の勝敗ニ由りて理非ハ決せられて治定すべきものなり，彼等植民地ニ於ける一勝一敗ハ大局ニ於てものゝ数ならず，而て彼等ハ本土の戦争地域を当面減せんと努めシニ非ずや，各国ニ於ける盟約中往々東洋を除外することあり，英ハ東洋の安寧ニ土地の侵害，利権の侵害，防禦ニ於てわれと盟約したる後ち，中さい裁判とやらの契約ニ由りて，日米戦争の際ハ英ハ中立を公言したるニ非らずや，日英協約ハ要するに東洋の安康を以て主眼となす，即ち此の協約ハ戦線が東洋ニ在りたる時の事を解釈するも可ならんか，或ハ然らずとするも我国の存亡を賭しても此際何故ニ此協約を表に取つて打つて出ずバならずや，唯其協約の精神をぬき取りて一視同人（ママ）各国派遣兵をして庇護をとらしめす，各国の利権を充分に衛りやるべき立言と方法とハ充分にあるべきを信ず，われ英に組せんか，東洋ハ遂ニ戦争を免れざるべし，戦争ハ猶賭博の如し，勝ニ非れバ即ち敗なり，独国勝たんか，我ハ大に迫害さるべし，而し敗残の同盟軍ハ一言だもわれを救ふ暇あらさるべし，同盟軍勝んか，我ハ何をか得べき，且つ勝ちほこりたる魯国のわれに対する圧迫と，由来信義ニ乏き英の行動をも算中ニハ置かざる可らず，然のミならず戦況の如何ニ由りてハ青島ハカイゼルの意を受けて，かねて独国と親善なる米国と袁[1]，立たる時より手なづけたる支那とに握手させ，たとひ戦ふニ至らざるも外交上大に煩累を来すべし，（昨今の新聞ニ既ニ此事ありと報ず）以上の所考ニ由りて此際日英協約を唱ふるは恰も遙々手を延バして欧洲の禍乱を東洋ニ導き来すニ異ならす，故ニ我ハ先以て英国に説き，次ニ各国に説くニ，人道上且つ戦ひの大局上要なき東洋ニ派遣しある兵をして戦禍を避けしめ，以て東洋の安寧を維持せんとす，而して各国の利権を保護すべし，但し一国の派遣兵か他国の派遣兵に挑戦するか如きことあらんか，我ハ東洋安寧維持上，兵力を以てこれに臨み，相当の手段を採るべし，即ちこれが保証として我ハ若干の兵を支那ニ駐箚せしめ，一ハ以て彼国の安寧をも謀るべし，又海軍をして近海を戒むべし，元来各国共ニ本土大戦争中殖民地の安全を希望する

こと切なるべし，人民等ハ派遣兵の安康を祈ること深かるべし，此際我が威信を充分に深く各国民の脳裏ニ印せしめ置く事ハ我国の為め一大勢力ニして，従て其利も大なるべし，つまらない協約を楯ニとりて幸ニ一洲一島をとり得たりとて，更ニ天敵国を作ると其利害いづれぞ，況や国家の存亡を賭するニ於てをや，由来我国のふるひ立ちて戦ふにハいつも我民族の生存上止む事を得ざる理由ありてなり，日清戦争を起す迄にハ朝鮮ニ於て我か竹添公使[(2)]，花房公使[(3)]ハ彼の弱兵に逐ひ払はれたれとも，深く其国辱を忍ひて兵備を整へつゝありしハ其背後ニ清国の在るありし為めなり，日魯戦争も亦然り，此度ハ国民も政府も予想だニせざりし大戦起りてわれも其渦中ニ投するニ至らんか，兵備ハ如何ニ国民の戦意ハ如何ニ，見渡す所老虎伏虎萎縮シありて一向に振ひ立たず，何を以て能く戦ひ能く勝つ事を得べき，故ニ実以て慨嘆に耐えざるなり，故ニ日英協約を敢てたどらずニ更ニ我れ盟主となりて此際東洋の安寧を維持するを以て上策となす，これ即ち一ハ協約の精神なりといふニこれあり候，然し今日となりてハもはや口外せざる方人心統一の上ニ於て宜しかるべしと被存候へとも御書拝読致候て，つい絮説小だん御海容下さるべし，早々不備

八月十一日　　鶴所

青山契兄　梧下

御令閨並ニ芳嬢ニよろしく，小生あついけれどもまだ上総へも出かけず居候，加藤の消息も久しく聞き及び申さず候，以上

(1) 袁世凱（えんせいがい）（Yuan Shi-kai）　清国の政治家．河南項城の人．1911年辛亥革命によって首相．12年清帝の退位後，中華民国初代大総統．ついで15年自ら帝位についたが，反帝制運動が起って失脚憤死．享年57．（1859–1916）

(2) 竹添公使　竹添進一郎．外交官・漢学者．明治17年京城事変（甲申の変）の時，朝鮮国駐箚公使．天保13年肥後天草生まれ．大正6年3月没．享年76．（1842–1917）

(3) 花房公使　花房義質（はなぶさよしもと）．明治・大正期の外交官．枢密顧問官・日本赤十字社社長等歴任．天保13年1月1日生，大正6年7月9日没．子爵．享年76．（1842–1917）

（注）日本は大正3年8月23日ドイツに対し宣戦布告をし，第1次世界大戦に参加する．

20　大正3年8月16日　　（8号）

（封筒表）　信州軽井沢　青山胤通様　親展

（消印　軽井沢　3・8・18・后0-3）

（封筒裏）東京市牛込区矢来町一，賀古鶴所

拝啓，十三日御投函之尊書十五日上総より帰来拝誦，米と共々厳正中立云々，是れ亦一良策としてかねて老人の嘉納致したるものニ候，但し後段米をして英艦監視云々に至りてハ少しく過ぎたるものゝやうニ被存候，但し尊書接手仕りたる日ハ時機既に去りて万事休すニこれあり候，実ニ早稲田内閣否加藤[(1)]之此度の処置ハ常識を以て判断候も偏狭にして軽挙，欧州に於ける一勝一敗其結果わが国家の始末を如何ニ致すべきやをも殆ど策無きが如し，あきれかへりたるものニ候，戦ハ所謂危道にして勝敗ハ予め知るべきものニ非ず候へども，所謂連合軍ハ烏合の衆，英の陸兵ハ殆と雇兵ニして訓練を欠き候，英艦精鋭無比と常にハ称したれとも今日ハ殆と守勢をとり候，露軍行動遅鈍，唯今の処にてハ恰も単ニ独仏戦闘と視るべきニ候，運輸交通機関，兵器は八百七十年戦[(2)]頃とは大ニ殊（ママ）なり候，露軍未だ独境ニ入らざる間ニ此の二，三週間にハ独ハ仏を突破すべく天下の大勢ハ既ニ定り申すべくと被存候，然ニ元来東洋の平和を保障すべき協約の相手がわれをして独軍と戦ふべく強請するニ至りてハ，実以て協約の精神に背き候のミならず英自ら其弱きをわれに示すものと見べきニて，頃日欧州戦報の信すべきもの少きハ亦以て其一斑を知るべきニ候，然るに自ら此の戦渦中に投ず，アヽ千万の遺憾ニ候，今日ハもはや骰子ハ加藤等の手にて投ぜられたり，遂に独軍即ち青島と戦ふべきなり，独軍豈敢て自ら屈すべきや，致し方無し，此後ハ我々ハ戦争の結果われニ損失少からん事を念するより外これなくと覚悟罷在候，世ハ末ニなり申候，御令息[(3)]御消息如何ニ候や，独国ニ在りたる学生等多くハ英国に避難いたしたるやニ承り及ひ候，額田[(4)]事めゝづニ

引張られ候て今日に至り，もはや一年志願兵たるべき期ハ過ぎ候，十一月ニ入り候へバ来春徴兵ニ採用さるべき名簿中ニ登録さるゝ運ニ相成り，学業上誠ニ遺憾ニ候へどもこれも国難故いたし方無しとあきらめ申候，此の数日彼れ是れ奔走御返事遅れ候段あしからず思召下さるべし，今日ハ当地もちと秋冷相覚え申候，皆々様へよろしく，早々貴酬

八月十七日　鶴所

青山契兄　梧下

（1）加藤高明（たかあき）　明治14年東大法学部卒業．三菱に入社．明治20年より官界に入り駐英公使・外務大臣・総理大臣歴任．この時加藤高明は外務大臣．安政7年生，大正15年没．享年67．（1860–1926）

（2）八百七十年戦　1870年～1871年の普仏（プロシャ・フランス）戦争の事．

（3）当時青山胤通の養嗣子徹蔵は私費にてドイツ留学中．（大正元年より3年迄）

（4）額田晋（ぬかだすすむ）　大正元年東京帝大医科大学卒業．同校薬物学室にて研究後大正7年ハーバード大学へ自費留学．帰国後順天堂医院研究所々長・北京協和医学校へ．帰国後兄 額田豊と共に帝国女子医学専門学校（東邦大学医学部の前身）創立に尽力．同大学学長・病院長・理事長を勤める．森鷗外死亡時の主治医を勤める．明治19年生，昭和39年没．享年77（1886–1964）．妻かつらは賀古鶴所の弟桃次の娘で，鶴所の養女として額田晋に嫁す．

21　大正3年9月19日　（15号）

（封筒表）本郷弓町　青山胤通殿　侍史

（消印　本郷・3・9・20・前0–7）

（封筒裏）封　牛込区矢来町一　賀古鶴所

（新聞記事切抜）

●京大教授申合　独逸語講義を排す

京都帝国大学医科大学にては我国医科学の進歩発達せる今日，長く独逸を祖として其の学説を祖述し絶えて独逸学派の圏内を出づる能はざるは自ら卑しうするの甚だしきものなりと憤慨し日独宣戦を機とし日本医科学の独立を図り学者の実力を示さんと画策中なるが，教授松下楨二・藤浪監の両医学博士は其の先声として講義は断じて独逸語を用ひず一切日本語を以つて教授する事にした

（京都電話）

これ真ならバ非常識，否狂愚といふべし，大学教ふる所の各科ハインテルナシヨナールなるべけれバなり，誤謬ならん事を切ニ希望いたし候

九月十九日　鶴所

青山契兄　梧下

殊ニ今日学者の最も慎むべき点なるべくとも被存候，以上

22　大正3年12月29日　（26号）

（封筒表）本郷弓町　青山胤通殿

（封筒裏）封　牛込，矢来一，　賀古鶴所

拝啓，目白老爺[1]より到来之七面鳥更ニ拝呈仕候

〇けふ団子坂[2]ニ会ひ候処ゼールム[3]はどれも能く出来るやうニなつた云々，先づ安心之事ニ候

〇先般之議会ハ愚問賢答とでも申すべきか，問者ハ己等の愚を世に披露して余す所なし，確ニ政府の大勝利に候

〇小生一日より五日迄上総へ出遊之心組ニ候，春緩りと御高話ニ接し度と存候，皆様へよろしく，早々不備

十二月廿九日　鶴所

青山老台　侍史

（1）目白老爺　目白椿山荘に住む山縣有朋の事．

（2）団子坂　千駄木団子坂に住む森鷗外の事．

（3）ゼールム　血清．

23　明治・大正　年4月12日　（10号）

（封筒表）本郷弓町　青山様　煙草添

小石川　賀古

（封筒裏）

拝啓，パルタガス[1]尚二箱残存せし由にて石井より寄せ候まゝ一箱御分ち申上け候，随分ふるく候まゝ香味ハ不明ニ候，早々

四月十二日　　鶴所
青山様　御中

（1）パルタガス　葉巻煙草の銘柄か.

24　明治・大正　年　月21日　　（5号）
（封筒表）本郷弓町　　青山胤通様　親展
（封筒裏）〆　廿一日　神田小川町にて賀古鶴所
今晩拝訪いたす様に申上げ置き候処，用事生じ有て参れず為，諸人に申伝への儀宜敷願ひ上げ候，北里[1]へも御知らせ下され度，其序に高木[2]を断はるやうに御申やり可被下候，小生には別に異存（大阪迄の書に対して）無之候，可然早々
廿一日　　賀古
青山様　侍史

（1）北里　北里柴三郎の事.
（2）高木　高木兼寛の事.

25　明治・大正　年4月6日　　（18号）
尊書奉拝見候，此度の京都学会に御臨場，旧都風物，山川の優美に接せられ候段欽羨に堪へず候，小生も今年ハ保養かたがた参集之心組ニ罷在候処，内藤順作の長男七才，脳膜炎に罹り候もやうに付きやめに致申候，今日ハ殆と危篤に陥り，為ニ内藤休み候まゝ漸く九時帰宅仕候，実ハ種々御高話を承はり度き儀もこれあり候へども右之始末ニて拝訪仕りかね候，名物いづうのさば寿し，ハヽナの名葉いつもながら御芳意辱く奉存候，加藤[1]ハ去る三日大坂新報社よりの書状に，本月も上京之つもりと記るしあり候へども未だ其報を得ず候，先ハ御礼旁早々頓首
四月六日　　鶴所
青山学兄　侍史

（1）加藤　加藤恒忠か．この時大阪新報社社長兼主筆に在職中.

26　大正6年2月20日　　（14-1号）
（封筒表）本郷区弓町二丁目　青山胤通様　侍史
（消印　□・6・2・21　・后10-12）
（封筒裏）封　小石川水道町五五　賀古鶴所
（消印　本郷・6・2・22・前0-7）
拝啓，老兄三日御差支之趣加藤へ申やり候処同人ニ於ても二日が最好都合之由申来候
〇場所ハ料亭にてハ妓がうるさくして閑談も出来す候まゝ加藤と相談いたし候処，田端之天然自笑軒ハ甘て安くて静かゆへ色気ぬきの雅会ニハ妙ならんと申越候，小生ハ不案内の地に候へども先つソレと定め申候，即ち三月二日田端の天然自笑軒［電話／帳を／一見候ハヾ大抵／けんとうが付くべくと被存候］に五時頃参集と定め申候，当日ハ何卒御さしくり御来臨下され度候
〇天下の代議士たるべく打つて出るにハソレ相応の経綸無くてハ適はず候，医者ハ先達から報告されて医事問題で出るとハ先以てあきれたものに候，先便申上げしや否忘れ候へども，常磐会[1]之節井上[2]曰く，先ころ中濱[3]から電話がかゝつた，バカニ叮嚀なる談話ぶりでさて曰く，金杉[4]に投票してくれ，井上曰く，人もあらうに金杉なぞを医界から出すとハ医者のつらあ（ママ）ごしだ中濱君，君が若し出るといふならバ僕はきつと投票するトやつた所，やはり色気があると見えてヘドモドいふていた，あれハバカダネー
〇ナンデモ青山や加（ママ）古ら邪間（ママ）をするといふ妄言を放ちて部下運動員を奨励しているさうに候，彼れが立うと誰れが立うとソンナ事ハ自分等の念頭にハ更々微塵も無き事ニ候，世はさまざまに候，早々不備
二月二十日　　鶴所
青山老兄　梧下
三月二日田端の天然自笑軒ニ於て午後五時頃より加藤送別会の事

（1）常磐会　山縣有朋を中心とした賀古・森鷗外・井上通泰等の短歌の会.
（2）井上　井上通泰（みちやす）.
（3）中濱東一郎　安政4年生まれ．中濱万次郎の長男．明治14年東大医学部卒業．福島・岡山・金沢医学校教授兼病院長．ドイツへ留学後内務省東京衛生試験所々長．昭和12年没．享年81．（1857–1937）

（4）金杉英五郎　明治20年東大医学部別課卒業．私費にて21年11月より25年4月迄ドイツ留学し耳科と鼻咽喉科を学ぶ．25年東京慈恵医院耳科・鼻咽喉科学の講義開始．耳科と鼻咽喉科を纏めて耳鼻咽喉科とする事を提唱．耳鼻咽喉科学の実力者となる．

27　大正6年2月21日　（14-2号）

拝啓，昨日御案内申上候加藤会の場所ハ風雨等の節ハ甚だ不便ニ候まゝ，尚加藤と相談の上ニ場所ハ麻布桜田町の興津庵ニ改め申候，別紙略図之地に候，御繁用中甚だ恐縮に候へとも，三月二日午後五時頃何卒同庵へ御来臨下され度奉希候，早々頓首

二月二十一日　賀古鶴所

青山老兄　御侍史

尚御相客ハ森，石井，後藤文学士に候，以上

28　大正6年5月5日　（21号）

（封筒表）本郷区弓町　青山胤通様　御中

（消印　小石川　6・5・6）

（封筒裏）封　小石川水道町五五　賀古鶴所

（消印　本郷　6・5・6・后1-2）

拝啓，支那一流之芳醇透瓶香一甕，御恵贈下され千万辱く奉存候，唯加藤の不在なるを遺憾ニ存候，将又先日ハ額田方へ綺麗なる衣装一襲御祝ひ下され御厚意之程深く感佩罷在候，妻[1]こと御礼の為めさつ速伺ひ可出之処兎角病気勝ちにて御不沙汰ニ相過き申あしからす思召下さるべく候，先ハ御礼迄，匆々頓首

五月五日　鶴所

青山様　御中

（1）妻　賀古の妻啓（けい）は慢性腎臓炎にて本書簡出信8日後，5月13日没．享年54.

29　大正6年7月12日　（30号）

（封筒表）　青山様　鶴所

（封筒裏）〆

名葉有難く奉存候，昨夜額田晋まいり候て，契兄腹痛を患ひられ候由を承知，心配の余り外出しやうかと存じたれども，まだ衰弱去らず家うちにてもフラフラ致し候まゝ先づ一両日してからと，さつ速森君方へ通知，夜面語なしくれ候やう依頼いたし置きしことに候，御手書を拝見，先ハと安心は致し候ものゝ此のさきは当分御静養大切ニ遊され度奉希候，早々不一

七月十二日　鶴所

青山契兄　梧下

30　大正6年7月13日　（22号）

（封筒表）　弓町　青山学兄　梧下

（封筒裏）封　小石川水道町五十五　賀古鶴所

今日は暑気殊ニ酷烈ニ御座候，別段御かはりも御座無く候や，軽井沢行は何卒当分御見合せ下され度候，身体を動揺候て為めニ又発痛候てハ多少御衰弱の折から心もと無く被存候，何卒熱くとも当分平臥，安静ニ遊され候様万願の至ニ候，小生のやうになるれバ暑気も亦さまでにハ無之晩冷の快は又別格に覚候，早々敬具

七月十三日　鶴所

青山契兄　搨下

百花園といふて講釈師や話し家の話を即記したる小冊子，小生方に沢山これあり候，病臥中人ニ読ませて聞くニ無聊を医するニ妙なり，御入用ならバ一寸と電話を下され候ハヽさし出し可申候

〇明晩あたり一寸と伺ひ度と存じ候，追白

31　大正6年7月15日　（29号）

（封筒表）　本郷区弓町　青山胤通様

（切手3銭）

（封筒裏）封　小石川区水道町五十五　賀古鶴所

（消印　6・7・16）

拝啓，此両三日暑気殊の外厳敷候処，其後御軽快之由，先以て安心仕候，承り候へバ明日ハ病院へ御出務之由，種々御決心の上の事とハ拝察致され候へども当分は何卒御安静に願ひ上候，将又長途之汽車旅行，軽（井）沢行等ハ何卒御見合せ下され度，一生ニ一度の願ひニ御座候

〇小生追々と快く相成り候へども散歩すべき場所無之候まゝ，明日より一週間許上総へまいり保養

の心組に候，其前拝眉の上種々御高話に接度と存じ候ひしも，ひるハ熱く夜ハ疲れ候て甚だ御不沙汰ニ相過き恐縮ニ御座候，いづれ帰京の上拝訪仕るべく候，何卒当分御安静ニ御保養之程奉希候，早々頓首

七月十五日　　鶴所

青山契兄　梧下

32　大正6年7月27日　（27号）

拝啓，其後御模様如何，野外運動は尚当分御無用に願度候，小生上総へまいり候処急に元気付き候へとも腰脚未だ健ならす候，用事ありて廿四日夜一先つ帰京仕候，本年の暑気は殊ニ厳敷様ニ覚候，貴地は八十度[1]位にて甚冷涼なりと新聞紙に見候，日々囲碁に御耽りの事と拝察いたされ申候，先は御近状御伺迄，早々敬具

七月廿七日　　鶴所

青山契兄　梧下

（1）華氏80度は摂氏26.7度に当たる．

33　大正6年7月31日　（16号）

（封筒表）信州軽井澤　　青山胤通様

（消印　□・6・7・31・后0-1）

（消印　軽井澤6・8・1・前0-9）（切手3錢）

（封筒裏）封　東京神田小川町五十一　賀古鶴所

拝啓，精純なる蜂蜜を得候まゝ少々拝呈仕候，水に和して林檎なぞを煮，ジヤミ[1]の代にパンニ付けて喰ひ，冷水に加へて用ひ候にシヤリベツ[2]よりも淡にして美味を覚候，当地暑気酷烈，再び上総へ保養ニまいる心組に候，御攝養大切ニ奉希候，早々敬具

七月三十一日　　鶴所

青山契兄　梧下

（1）ジヤミ　ジヤムの事．

（2）シヤリベツ　舎利別．砂糖水の事．

34　大正6年8月21日　（38号）

拝啓，当地此数日速ニ秋冷相催しけふハフランネルの衣を重ね申候，貴地定めて冷快，うづらも美味を加へ来り，野草美花を呈し候はん，御疲労日増ニ御恢復，御元気の由伝承，乍憚歓喜罷在候，小生先日上総鶴荘ニ再遊，毎日夜網に出で鮮魚のナマスを喰ひ過ごし，帰来少々腸を損じ候ひしも昨今恢復仕候，自ら飲食ニ心を用ひざれバやゝもすれバ健康を損じ候，昔はこうでハ無つたがと残念ニ被存候，加藤最近の書ニ由れバ既に喜望峰を通過の模様ニ候，九月中旬ニハ帰朝の日取りニなり候，多少面白き話柄を懐き帰へるべくと被存候，扨て額田晋事かぶと蟹心臓研究の草稿校正も頃日漸く相済み，旁初志の如く学兄の内科ニ帰復致度由今日も亦来話候，薬学室へ留る方佳ならんとの御厚意ハ既に篤と申聞け置き候へども，どこ迄も初志を貫き度旨頻に申請ひ，且つ此の休課後即ち九月より帰復を願ひ度故小生より宜敷申上げくれと申候，それニ約半ヶ年前より何か研究に着手致居候アルバイトは内科ニ帰復せざれバ目的を達し難しと申候，勿論貴旗下ニ帰復候へハ所謂帰へり新参故或ハ助手にハ成れまじく候まゝ，副手にてもくるしからずと申候，其意気ぐみハ又愛すべき点も有之申候，種々御都合もこれあるべく候へども此儀何卒御承引なし下され候様奉希候，学界政界何一つ特ニ新聞を得ず候，承れバ日々囲碁に御消光の由，仙境ニ在りて反て塵界の事ニ通じ候事あり候，何か新聞もあらバ御もらし下され度候，森相変らず健啖採筆，古書を漁りあり候，小生頃日幕末名医楽真院多紀元堅[1]の遺稿を得候，一寸と貴き書の由森申候，先ハ右所願迄，早々頓首

八月廿一日　　鶴所

青山学兄　侍史

乍毫末皆々様へよろしく，以上

（1）楽真院多紀元堅（たきもとかた）　江戸後期医学館総裁多紀元簡の第5子として寛政7年に生まれる．天保11年法印となり楽真院と称す．徳川家斉・家慶・家定の3代の将軍に仕えた．安政4年没．享年63．（1795–1857）

35　大正6年12月30日　（34号）

（封筒表）　本郷弓町　青山徹蔵様　御中

（封筒裏）　封　小石川水道町五五　賀古鶴所
拝啓，何廉御繁忙之折から尊大人[1]御遺命之由を以て各種の芳烟御恵贈下され御芳意千万辱く奉存候，御思召之程有り難く記念ニ可仕候，先は御礼までニ早々敬具
十二月三十日　賀古鶴所
青山徹蔵殿[2]
尚々略儀ながら当日の所感認め添へ申候
わがつまハ　花陰ニこそはふりしか
今ハ枯れ野ニ友を送りつ
乍毫末皆々様へよろしく御申上げ下され度奉願候，以上

（1）尊大人　青山胤通の事.
（2）青山徹蔵　大正・昭和期の外科医．長野県出身．医師熊谷陸蔵の次男として明治15年生まれる．明治39年東京帝大医科大学卒業．泉橋慈善病院外科医長・帝大講師．43年青山胤通の養嗣子となり長女 芳と結婚．大正14年より昭和11年迄帝大外科教授．昭和28年没．享年70.（1882–1953）

36　大正6年12月31日　（35号）
（封筒表）本郷，弓町二丁目廿六　青山徹蔵様
（消印　神田・□・12・31・后4）（切手3銭）
（封筒裏）封　十二月三十一日
神田小川町五十一　賀古鶴所
御書辱く拝読仕候，大好物たる珍品カビヤ[1]御恵贈下され御芳情の程千万有り難く奉存候，御書風を熱視候ニ自ら故大人之風骨を帯ひ来りたるニ驚き申候，もはや一と夜が巳午の境[2]に候，御機嫌克く春を迎へられ候様に皆様へ乍憚御申伝への程希上け候，早々頓首
十二月卅一日　賀古鶴所
青山様　御侍史

（1）カビヤ　蝶鮫の卵の塩漬け，キャビアの事.
（2）巳午の境　大正6年の干支は丁巳，大正7年の干支は戊午.

37　大正7年2月15日　（37号）
（封筒表）本郷弓町二丁目三四，青山男爵家 御中
（封筒裏）封　小石川水道町五五　賀古鶴所
拝啓，故胤通大人之御かたミとしてけつこうなる品々御贈り下され御芳意之程千万辱く奉存候
一，御写真誠ニ善き出来にて拝見するからニ何と無く心強く覚申候
一，御あかつきとハ申ながらまだ御新しき猟虎之革製外套のかけえり御生前度々拝見いたせし品ニ候
一，御常用鰐革製葉巻たはこ入れ御なじミの品にて殊ニ御手ずれのあともゆかしく覚え候，それぞれ長く珍重仕る可く候，何卒御母堂様ニよろしく御申上げ下され候様奉希候
尚々貴所之御書風故大人ニ似たとハおろかソックリにてうれしく拝見仕候，何卒此上とも大師流御学ひ遊され候様，これハ余事ながら奉願候，此のごろ老生の所感乍憚こゝに書き添へ申候，御憫察下さるべく候
さひしとは人もいへとも君ならて
外ニ語らむ友の無き身ハ
大正戊午[1]二月十五日　賀古鶴所
青山徹蔵様　御侍史

（1）大正戊午は大正7年.

38　昭和（4）年6月10日　（36号）
（封筒表）　本郷弓町二ノ廿六　青山徹蔵様
略伝資料草稿在中
（封筒裏）封　六月十日
神田小川町五十一　賀古鶴所
御あつく相成り申候，先大人之伝ニ資すへき事種々熟考仕り候上ニ
一，伝染病研究所を内務省より文部省ニ移管の一條ハ小生か執筆候へハ，自らうち幕をさらけ出す事ニ相成り候てトバッチリを方々へはね飛ハす事ニ相成り，反つて然る可らずと存し候ふしも有之候まゝ，過日田代義徳氏[1]来訪致され候折委細ニ申述候て，同君執筆の事ニ仕り候
一，人夫救護会の事ニハ余り与られず候様ニ思れ

候，而してあと始末迄北里氏等の為せし事故これ亦其行がゝり等くはしく田代君に話せし処，此ハ寧ろ記載せざる方可ならん歟といふ事ニ相成り申候

別紙

一，御留学当時の事

一，香港ペスト研究時之余話

一，日露戦役の際，率先陸軍衛生部之援助として外山ケ原の陸軍予備病院ニ出務いたされたる事，これも内幕の多少の事ハ略き申候

一，明治大帝御悩重らせたまひたる折，御用掛として出仕いたされ大ニ民心を安ぜしめし件，これ亦前項と同じく略筆仕候

一，欧州大戦当時の御識見の事

一，医療上ニ於て多少平常の御気質を現ハし置き候，馬車を用いて数度迎へた福翁ハ渋沢子又米国帰へりの縉士ハ［又名ヲ忘レ候／一バンキール］ニ候，又御嗜好の事ニもあつさりと末尾ニ記し置き申候

一，医育ハ単なる医学促進の方法を概説したるものニ候へども，此ニ関連する所ハなかなか広く候まゝ種々ニ腹案ハ立て直し居り候へども，執筆ハいつ頃迄とも予め申上げかね候，外ニ書く人あらバ御書せ下され度候，然し決して投げやり置くわけニハ無之候，或ハ一之論説のやうにも相成り，伝記ニハ如何やとも被存候

○　さて

一，一昨日歟鵜崎熊吉氏[2]よりハ腹案が立ちたらバ筆記ニ行かんと申こされ，同日又稲田内科教室の編纂事務所よりも御催促を蒙り候，さて此拙稿ハどちらへさし出し候てよろしきや不明ニ付き兎も角も一応御手元迄さし出候，可然御取り計ひ下され度候，名古屋の舎弟[3]重病の肺炎をやみ（既ニいゆ）なぞ親戚中ニ取こみあり候て案外遅れ申訳無之候，御海容下さるへし，匆々不備

六月十日　　賀古鶴所

青山徹蔵様　梧下

草稿ハ八葉有之候

（1）田代義徳（よしのり）　明治21年帝大医科大学卒業．明治39年より大正13年まで東京帝大医科大学整形外科教授．昭和4年当時は田代病院長の外各種の社会事業に関与した．

（2）鵜崎熊吉　「青山胤通」の編集者．本書の発行所は東京帝国大学稲田内科教室内青山内科同窓会．発行日は昭和5年5月8日となっている．よってこの手紙は昭和4年頃のものと思われる．

（3）賀古桃次　賀古鶴所の2番目の弟．愛知県立医学専門学校教授．鶴所は桃次の娘かつらを養女とした上，額田晋に嫁がせる．

［14］桂太郎の書簡

桂太郎は明治・大正期の陸軍軍人・政治家．嘉永元年長州（萩）藩士家に生まれる．戊辰・日清戦争に軍人として活躍．日露戦争時総理大臣を勤め，以後2回総理大臣を勤める．陸軍大将．公爵．大正2年10月10日没．享年66．（1848–1913）

明治43年8月関東・甲信越・東北地方に明治期最大の水害が発生した．この時内閣総理大臣兼大蔵大臣 桂太郎は家族と共に新築の軽井沢離山別荘にいた．鉄道も電信も不通となり，凡そ8日間軽井沢にとぢ込められた．政府はこの非常時対策のために桂へ必死になって連絡を取り，逓信大臣 後藤新平の努力で松本経由中央線で何とか帰京出来た．（軽井沢より松本までは自動車を利用したと思われる）この手紙は桂総理大臣が軽井沢より東京へ戻る寸前の貴重な資料である．

1　明治43年8月16日　　（113号）

（封筒表）軽井沢別荘　博士　青山胤通殿　親展

（封筒裏）　封　　離山　桂太郎

尓来不伺御動止候処，此以来之暴風雨ニ係らず御清栄御起居被為在奉拝賀候，将又過日ハ切角御来訪被成下候処，折柄西京より之無拠来訪之客有之面会中，不得拝芝遺憾千万ニ有之申候，実ハ其後得拝眉，例之会之儀ニ付てモ縷々御相談仕度趣之処，前件之場合ニて如何ニモ残念ニ存申候，老生モ公務差置□□義モ有之，旁以日一日ト何ノ線路カ開通之義其筋へ督促仕，漸々ニシて甲州線ニテ

帰京候事ニ決シ，本日只今帰京之途ニ上リ申候，尤モ家族等ハ残留致居候ニ付千万申上兼候得共，万一病気等ニ罹リ候節ハ可然御保護相願度候，右御断旁御依頼ヲ兼ね寸呈如此ニ候，其内時下御自愛専一ニ祈上候，敬具

八月十六日　午前　　太郎

青山老台　閣下

［15］ 加藤恒忠の書簡

加藤恒忠は明治期の外交官・ジャーナリスト．安政6年1月松山藩士家に生まれる．パリ法科大学に学び外交官として活躍．後に大阪新報社社長兼主筆．貴族院議員．松山市長を勤める．大正12年3月没．享年65．（1859–1923）

1　明治37年12月31日　（111号）

（封筒表）Legation[1] du Japon Bruxelles

Monsieur Aoyama Tokio japon

東京　本郷，弓町　青山胤通殿

（消印　JAN 05 JAPAN）

（封筒裏）封蝋

拝啓，少々はやいが新年の御祝詞申陳候，戦争引つゞき上首尾なにより芽出度御同賀之至御坐候，僕等外国ニ居る者ハ陸海軍のおかげにて肩幅広く相覚へ，尤ふだん日本嫌の連中ニは我成効をそねみいろいろの熱を吐くものあれども是ハ少数の様なり，一ツ残念なるは殆一ヶ年已来我連戦連勝を実見し，旅順の運命旦夕ニ在ることも知りながら大陸人の多数ハ今ニ最終の勝利ハ露軍ニ在りと信し居るごとく相見え，しかし旅順落城，奉天占領の暁ニハ輿評急ニ一変すべしと相楽候，賀古ハ元気と見え毎々新聞紙ニ歌あり，朝から夜迄負傷の療治も永引けハ随分哀しくなるだろふが同人の性質でハ毎日耳の穴をほぜくるよりハ勿論得意ならんと相察し，煙草送り度存候得共いかにして送りよきや不相分，一旦東京ニ送れハ矢張十五割の税を払はねハならず直接戦地へ小包がきくや否，当地の郵便局ニてハ承知せず相扣居申候，陸老人[2]とハ其後互ニ無音相過居候処，新聞ニよれハ此節肛門病にて入院致居候由，此上穴をはらしてハ老人益々不精ニなるべしと存居候，呵々，若し御高会ノ節ハよろしく，小生去ル六月女子を挙げ誤て出来たる子ゆへあや子と命名いたし候，先般御忠告の事ハ随分注意して勉強いたし居候間，御安心可被下候，御一笑々々頓首々々

恒忠　拝

十二月尽

青山老兄　侍史

（1）Legation　公使館．

（2）陸老人　陸羯南（くがかつなん）．明治期の独立新聞記者．安政4年陸奥国津軽藩士家に生まれる．青森新聞編集長・内閣官報編集長・新聞日本発刊等その執筆は言論界で重きをなした．明治40年9月2日没．享年51．（1857–1907）

2　大正（7）年11月2日　（112号）

（封筒表）　本郷弓町二丁目　　青山徹二（ママ）様

（封筒裏）〆　東京市神田区小川町五十一番地

賀古病院　　電話　神田三一二五番（ゴム印）

拝啓，皆様愈御清安被為在大慶奉存候，小生儀永々御芳情を蒙り不知所謝候，おかげにて入院以来漸次快方相過候処，前月中旬又々一頓挫を生し賀古始メ佐藤[1]・入沢両博士の配慮ニより昨今軽快，御放慮被下度候，近日一応帰郷致度候得共未得許可，尚十日計ハ辛抱の決心ニ御坐候，扨又御食器既に返却ノ積なりしに此節散見致候ニ付今日為持上候，尚又別箱ダヌマルク製小花瓶一対ハ故陸羯南臨終前尊大人へ差上くれと被頼候処，拝（ママ）達遅引のため尊大人も御遠逝被遊候ニ付此度小生へ来贈有之候，然るニ是ハ故人ノ遺志ニより其家へ御受納被下候方適当と考へ為持上候間，草花ニても御挿入之上御霊前へ御備へ被下候ハヽ，故羯南の霊亦大ニ可喜と存候，右当用而已申上度，敬具

十一月二日　　加藤恒忠

青山博士　侍史

尚乍端筆御北堂様・奥様へ千万よろしく御挨拶被成下度願申上候也

（1）佐藤　佐藤三吉．明治20年より大正10年まで東大医学部外科教授を勤める．

［16］加藤弘之の書簡

加藤弘之は明治期の指導的思想家．天保7年但馬国出石藩に生まれる．幕府開成所教授職並，新政府に出仕して外務大丞・初代東大法文理学部綜理・東大総理・帝大総長を歴任．教育制度の改革に尽力．男爵．大正5年2月9日没．享年81．（1836–1916）

1　明治44年6月10日　（77号）
（封筒表）本郷弓町二丁目三四
青山胤通殿　願用　（切手3錢）
（消印　麹町　44・6・10・后5–6）
（消印　44・6・10・后7–8）
（封筒裏）〆　上二番町　加藤弘之
拝啓，□□ニ御清福奉賀候，然レハ池田庄吉ト申者此頃御診察願居候よし之処，右ハ胃潰瘍之事，経過如何可有之哉，先生方少々定議も有之御事ユヘ本人ヘハ洩シ不申候得共，即今之御意見如何ヤ相伺度，概略之御見込御示シ可被下候ハヽ幸甚ニ奉存候，此段御依頼申上候也，匆々敬白
六月十日　加藤弘之
青山国手　梧下

［17］金子堅太郎の書簡

金子堅太郎は明治・大正・昭和初期の官僚・政治家．嘉永6年福岡藩士家に生まれる．ハーバード大学にて法律を学ぶ．伊藤博文の知遇を得，大日本帝国憲法等諸法案の起草に尽力する．日露戦争及びその講和条約締結に貢献．農商務・司法大臣歴任．伯爵．昭和17年5月16日没．享年90．（1853–1942）

1　明治39年4月17日　（125号）
（封筒表）医学博士　青山胤通殿　親展
大橋翠石氏紹介
（封筒裏）〆　東京市麹町区一番町三十番地
男爵　金子堅太郎　（ゴム印）
拝啓，本邦画家大橋翠石氏[1]病気御診察を相願度，今般岐阜縣大垣より登京致候間御紹介申上候，本人ハ乗之画名人ニて已ニ先年巴里大博覧[2]ニ於テ金牌を得，又一昨年米国大博覧会[3]ニ於テも同しく金牌を得たる者ニ有之，加之去寅年[4]ニは陛下より乗之画幅揮毫被仰付候者ニ有之候処，先年胃病ニ罹り田舎ニて療養致居候得共快癒ニ不致難渋致居候間，今度上京御診察相願度申出候次第ニ御坐候，何卒十分御診察之上後来之心得方御垂示被下度願上候，此名家を死失するハ本邦美術社界之為ニ遺憾と存候間，偏ニ御願申上候，匆々敬具
四月十七日　堅太郎
青山博士殿　梧右

（1）大橋翠石　岐阜大垣出身．日本画家．「虎の翠石」と云われる．（1865–1945）
（2）巴里大博覧　明治33年パリ万国博覧会．
（3）米国大博覧会　明治37年米国セントルイス万国博覧会．
（4）寅年　明治35年壬寅．

［主要参考文献］

朝日新聞社編『朝日日本歴史人物事典」』朝日新聞社　1994年11月30日発行
鵜崎熊吉編『青山胤通』青山内科同窓会　1930年5月8日発行
泉孝英編『日本近現代医学人名事典　1868–2011』医学書院　2012年12月5日発行
『会員氏名録』東京大学医学部鉄門倶楽部　2001年発行